

3月12日

主教教会博士グレゴリー

Gregorius I

(540頃～604.3.12)

～中世ヨーロッパ教会の父～



「第64代ローマ教皇
グレゴリウス1世」

在位:590～604

人名事典などではグレゴリウスと表記される彼は、教皇レオ1世と共に「大教皇」の称号を持つ。また「大グレゴリウス」と呼ばれるのも彼である。

グレゴリーはローマの元老院議員の家に生まれる。父はローマ市の長官から修道士になった人物で、母と叔母も聖人とされている。

そしてグレゴリーも教皇ベラギウス2世のもと、助祭となり、コンスタンティノポリスへ教皇特使として赴いたり、ビザンティウムで大使をしたりする。しかし彼は、同時にベネディクト会の修道士となり、また自宅を寄付して修道院にしたりもする。

ベラギウス2世の死後、彼は推されて教皇となるのだが、修道会出身の教皇は彼が初めてだった。教皇になった彼は、外的にも内的にも不安定であった西方教会の強化に励んでいく。外的にはローマはイタリアを席卷していたランゴバルト族に対し、彼らの王を説得し、ローマを襲わない約束を取り付ける。また教会内においては、「教会の土台はペトロの座を守るローマ教皇である」と首位権を力説し、自らを神の僕の僕と呼んだ。

さらに内的には教会の規律を重んじ、聖職の売買を禁止し聖職者の修道をすすめる。また典礼と聖歌の整備に取り組むが、これがグレゴリウス典礼書やグレゴリオ聖歌の成立の契機となる。

さてグレゴリーは、諸民族のキリスト教化に使命感を感じ、ランゴバルド族(イタリア)やカトリックになったばかりのイスパニア(スペイン)、フランク王国などに多くの書簡を送り、宣教をしていく。また、596年、アウグスティヌスと40人の修道士をアングロ・サクソン人のキリスト教化のためにイギリスに派遣する。彼はそのため、「イギリス教会の父」とか、「中世ヨーロッパの父」とも呼ばれる。

彼の800通にもわたる多くの書簡や毎日曜日の説教原稿、そして、「対話」、「道徳論」、「司牧規則」といった著作は、今も残されている。それらは中世のみならず、現在の教会に対しても大きな影響を与えている。(Y)

<特禱>

全能の神よ、あなたは主のしもべ、主教教会博士グレゴリーの教えによって公会を照らして下さいました。どうか天の恵みをもって公会をますます豊かにし、忠実な証びとを起して下さい。その生活と教えに倣い、わたしたちがすべての人に救いの真理を宣べ伝えることができますように、主イエス・キリストによってお願いいたします。

アーメン